The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	外国語のユーモア教育について ： 日本語学習者対象の授業および英語学習者日本人対象の授業のケーススタディーから
Author(s)	Vaage, Goran
Citation	大阪大学日本語日本文化教育センター授業研究. 2016, 14, p. 11-21
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/56961
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

外国語のユーモア教育について
― 日本語学習者対象の授業および英語学習者日本人対象の授業のケーススタディーから ―
Teaching the Humour of a Foreign Language:
A Case Study of Classes for L2 Learners of Japanese and Japanese Learners of English

VAAGE Goran

【要旨】

本稿では、まず日米のユーモアを比較し、それぞれのジョークの基礎構造を提示する。次にこれらの構造を取り入れた授業のケーススタディーを紹介し、外国語のユーモア教育をこれからどのように行うべきかを提案する。

「日本語学習者対象・日本語で行う授業」「日本語学習者対象・英語で行う授業」「日本人対象・日本語で行う授業」「日本人対象・英語で行う授業」という 4 つのタイプの授業において学習言語のユーモアをカリキュラムに取り入れてみた。

初級者に関しては文化や言語の予備知識はそれほど要求されないユーモア教材を使うことによって、より外国語習得に集中できたことが分かったが、上級者は例えば、やりとりに基づいている「ボケ」と「ツッコミ」の概念を知ることによって、落語、関西関東の対立などの文化知識を習得したとともに、コミュニケーション力も上げたことが明らかになった。

はじめに

本稿では筆者が2012年から2013年に行った日米ユーモアの比較調査から得た結果を2013年から2015年にわたって外国語・比較文化教育の現場でどのように活用したかを報告し、外国語のユーモア教育をこれからどのように行うべきかを提案する。「日本語学習者対象・日本語で行う授業」「日本語学習者対象・英語で行う授業」「日本人対象・日本語で行う授業」「日本人対象・英語で行う授業」という 4 つのタイプの授業において、主に対象言語のジョークの構造とお笑いの仕組みを中心にカリキュラムに取り入れてみた。本研究の結果および教育への示唆はあくまで学習者の感想と筆者の主観的な分析に基づいていることを指摘しておく。

先行研究

お笑いとユーモアの研究は欧米によっても古くから行われてきた（Huizinga 1938、Caillois 1962）。しかし、教育現場で応用できるものに関しては、Huizingaのプレー理論などの抽象的な分析より、各言語または各文化社会のユーモアはどのようなものかを具体的に示す書物が要求される。さらに、本稿が挑むその応用についての現場研究も望ましい。日米に限定すれば、「英語落語型」「英語ジョーク型」「日本のお笑い自己啓発型」という 3 つの大きな種類に分けられる。

英語落語型の書物はその名が示すように、日本の代表的な喜劇である落語を何らかの形で英語で楽しめるように工夫したものである。海外で実際に落語を演じた経験がある大島（2009、2013）と桂かい枝（2007）はこのジャンルの代表的な執筆者だろう。多くの書物は日本語母語話者のための教科書という形で書かれ、比較的分かりやすい英語小噺、元の日本語のテキスト、単語表、説明文およびコラムから成っている。興味深いことに「英語漫才」のような書物は、

筆者の知る範囲では一冊も存在しない。これは、漫才の形式および構造は、落語に比べて英語で演じるには適していないことを意味しているのではないだろうか[1)]。

一方、英語ジョーク型の書物は、欧米人による英語で一般的に語られているジョークを日本人に理解してもらうことを目的とする。入口は執筆者によって多少変わるが、基本的な教育内容は、ユーモアおよびジョークを使用し、英単語や英文法などを教えることである（丸山2002、豊田2015）。東森（2011）は、関連性理論を用いて、英語のジョークの様々な仕掛けを説明しているが、欧米のユーモアの構造自体の分析は限られており、日本のユーモアとの比較もない。言い換えれば、この種類の書物は、英語ジョークの構造ではなく、ジョークを通した英語能力の向上に重点を置くと言える。

最後になる日本のお笑い自己啓発型の書物は「さあ、ツッコミを取り入れよう」や「ツッコミは最強の武器になる」（村瀬2015）などと記載されているジャケットを持ち、一般の日本人でも使える芸能界におけるコミュニケーション技を紹介する（知的生活追跡班2011、タカハシ2013）。このような書物は、あくまで科学的な調査ではなく主観的な分析に基づくため、信ぴょう性には欠けているが、多くの実例も載り、お笑いに関して一般に抱かれた信念を反映している点で参考になるだろう。

すなわち、異文化間コミュニケーションを取り入れつつ、ユーモア構造の比較も行う日本語学習者向けの日本の笑いへの入門のような包括的な書物はないため、外国語のユーモア教育を行うために以上のような文献からヒントを寄せ集め、カリキュラムを編成するしか方法がないということになる。

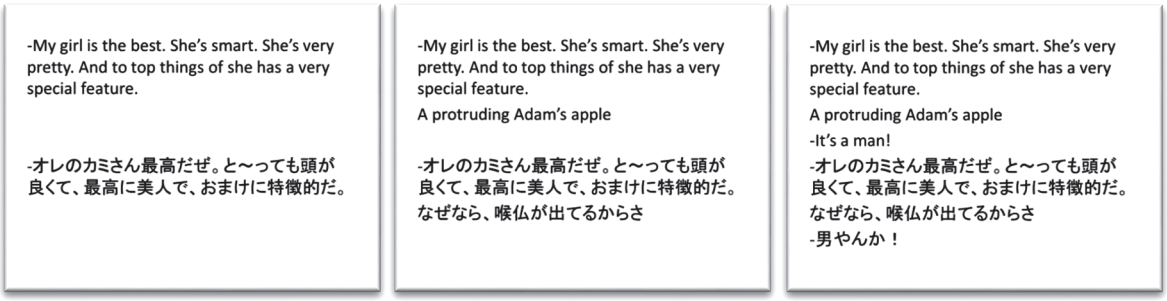
日本語のユーモアと欧米のユーモアの違いについて

ユーモアは文化に依存しており、ある文化社会のユーモアを理解するには文化的知識も言語的知識も必要とされるため、外国語学習者にとって大きな壁となること考えられる。日本とアメリカのユーモアの間の最も重要な違いはジョークの構造ではないだろうか。南原はこの違いについて以下のように述べている。

> アメリカには「スタンドアップコメディ」というジャンルがありますが、あれが日本人にまったくウケないのも、「ボケ」だけで「ツッコミ」がないからでしょう。たとえば、こんな感じです。「おれのカミさんは最高だぜ。と～っても良くて、最高に美人で、おまけに特徴的だ。なぜなら喉仏が出てるからさ」アメリカ人は、これで「ワーッハッハ」と大笑いします。でも、日本人は笑えません。ぜんぜん、面白くない。ところが同じネタでも、最後に別の人が「男じゃんか！」とツッコミを入れると、それなりに笑えるようになるのです。（2010、p.30）

確かに、授業中図１のパワーポイントスライドを順番に示すと、欧米出身日本語学習者の多くは２番目のスライドで笑い、それに対して日本人の学生はほとんど３番で笑うことが明らかになった（原文日本語、訳は筆者）。

補足すると、日本のユーモアはやりとりに基づき、ジョークの構造は「ボケ」と「ツッコミ」からなり、それに対してアメリカのユーモアは独白的であり、ジョークの構造は物語による「セットアップ」と「パンチライン」からなると言える。以上のジョークの「…おまけに特徴的だ」までの部分はある種のストーリを描くセットアップであり、「なぜなら、喉仏が出てるから



↑留学生が笑う所　　↑日本人が笑う所

図１　笑う所の比較

さ」は意外性を持つパンチラインに当たる。しかし、南原（前掲）が指摘しているように日本人母語話者はアメリカのユーモアの物語とその展開を聞いてもツッコミの部分がないと笑わない。

一方、欧米人に母語でツッコミのような発言をすればどうなるかを尋ねると、やはりこの部分を口に出さない方が良いと言う。ジョークやおかしみの解釈は宙に浮かせるのが一般的であり、むしろ、ツッコミのような指摘を行えば、「ジョークを殺す」ことになり、せっかく盛り上げられている場の雰囲気を壊すことになるからである。つまり、ツッコミは日本のユーモアにおいて欠かせないが、欧米のユーモアではあってはならない。

以上述べたことをまとめると、次のようなユーモアにおける基礎概念が出来上がる。

日本：	ツッコミ
欧米（アメリカ）：	パンチライン

図２　ユーモアの基礎概念

もちろん、ユーモアには個人差があり、「日本」または「欧米」をひとくくりにするのにも問題があるため、それぞれのユーモアおよびジョークの基礎的な構造を定めるのは困難である。比較する上で、限られたエリートではなく、庶民や幅広い年齢層が受け入れる基本的なジョークややりとりの形が要求される。本稿ではジョークの構造に関して以下の妥協を提案する。

欧米（アメリカ）：
セットアップ　→　パンチライン
日本：
（フリ）　→　ボケ　→　ツッコミ

図３　ジョークの基礎構造

前述した以上に様々な部分の定義の詳細は控えるが、フリは、「ボケをしても良い」という合図であると考えられる。日本のユーモアにおいて現れる時と現れない時がある。図３に示されているジョークの基礎構造の日米の違いは本稿で取り上げる授業のユーモアのカリキュラムの土台となる。

ついでながら、欧米のユーモア研究では不適合・解決ジョーク（Incongruity-resolution（IR）jokes）とノンセンスジョーク（Nonsense jokes）を区別するのが一般的である。Ruch他（1983）は「不適合・解決ジョークとセックスジョークには、解決が出来る不適合な（曖昧な）要素が含まれている。それに対して、ノンセンスジョークは解決不可能の状態にとどまる（p.443、原文英語、訳は筆者）」としている。この区別は直接日米間のジョーク構造の比較には関係ないが、図３の枠組みに当てはまらないユーモアがこの区別によって説明できる。つまり、上述した「カミさんジョーク」は解決する（カミさんは結局男性だった）が、例えば、一世代前の小島義雄と、2015年現時点「安心してください。はいてますよ」というセリフで人気が急上昇している安村昇剛のようにテレビで水泳パンツ姿で現れること自体のようなユーモアに対して、説明や解決は必要とされないわけである。とは言え、「なんで海パンはいてるねん！」とツッコめないわけでもない。

授業概要

果たして、図３の枠組みを土台にして、外国語学習者にユーモアの構造を教えるのは効果的なのだろうか。具体的にどのような教育方法および教材が適しているか、また学習者の反応はどうであるかを4種類の授業での実験を通して検討していく。表１は様々な授業の簡単な概要を表したものである。

表１　授業の概要

授業名：	日本語実習：中上級読解（日本の大衆文化の読解）				
機関名：	大阪大学日本語日本文化教育センター				
授業の種類：	実習	受講者数：	15名前後	使用言語：	日本語
学習者の母語：	多様	学習言語：	日本語	レベル：	中上級
授業の全体的目標：	ポップカルチャーやサブカルチャについてのテキストを読むことによって現代日本文化へのより深い理解を得ること。				
授業名：	日本語学研究（言語と社会についての講義）				
機関名：	大阪大学日本語日本文化教育センター				
授業の種類：	講義	受講者数：	６名前後	使用言語：	英語
学習者の母語：	多様	学習言語：	日本語	レベル：	中上級
授業の全体的目標：	異文化コミュニケーション、社会言語学の基本について学ぶ。特に日本の文化と西洋文化の違いに焦点を合わせ、日本で生活において役に立つマナーや社会のルールの知識も身に付けること。				
授業名：	外国語教育のための社会言語学				
機関名：	大阪大学外国語学部				
授業の種類：	講義	受講者数：	70名前後	使用言語：	日本語
学習者の母語：	日本語	学習言語：	多様	レベル：	多様
授業の全体的目標：	社会言語学の基本知識を知ること。 言語について分かりやすく科学的に説明できる力を身につけること。				
授業名：	Changes and Variation of English（英語の変化と変異）				
機関名：	神戸女学院大学文学部				
授業の種類：	講義	受講者数：	100名前後	使用言語：	英語
学習者の母語：	日本語	学習言語：	英語	レベル：	多様
授業の全体的目標：	男女差、地域差、年齢差など言語変異および文化や時代の流れとともに変わる言語変化について学ぶ。様々な英語があることを理解すること。				

言い換えれば、「日本語学習者・日本語で行う授業」「日本語学習者・英語で行う授業」「日本人外国語学習者・日本語で行う授業」「日本人外国語学習者・英語で行う授業」という 4 つの種類の授業を行ったわけである。いずれの授業も一年に一学期15回に渡って行い、そのうちの 2 回はユーモア教育に当てた。各授業の全体的目標を尊重しつつ、 2 回分のユーモア教育の授業の目的は外国語のユーモア構造を理解することにした。多少教材を入れ替え、この試みを2013年度から2015年度まで 3 度行った。

授業の具体的な進み方に関しては、ユーモア教育を学習者の母語で行おうが、外国語で行おうが、目的に変わりはないが、いくつかの点で授業内容の時間の配分を工夫する必要があることが分かった。やはり外国語での授業になると、より言語能力の向上に重点を置いた方がよいように思われる。とは言え能力は、ただ単語および文法のみならず、例えばツッコミへの理解から生まれるコミュニケーションスキルを習得するのも可能となることに注目したい。一方、母語で行う授業は、より綿密な分析、またはジョークの構造だけでなく社会的文化的な側面も取り入れる余裕を持つことができる。なお、時間の配分以外にも、外国語で授業を行う場合、学習者が授業内容についていけない心配も当然ありうる。

教材の紹介

ここで上記の授業に用いた教材の一部を簡単に紹介する。まず、外国語の能力向上のための教材に関しては、やはり英語落語型のようなものに記載されている、分かりやすい小噺が適していることが明らかになった。日本人向けの英語落語と言えども、大抵の場合、日本語文や単語表も付いているため、日本語学習者にも十分使い勝手がよいと言えるだろう。具体例をあげると、大島（2013）には以下のような日本語にも書かれている小噺がある。

源：徳さん、どうも！

徳：ああ、源さん。

源：この間作ってあげた本棚どうだい？

徳：あ、あれはもう壊れちゃったよ。あれはよくなかったね。

源：何だって？どうして？まさか何か上に置いたんじゃないだろうね？（p.53）

このような小噺は比較的に簡単な日本語で書かれ、社会的文化的な知識も要求されていないため、学習者にとって込められているおかしみは理解しやすい。理解したところで学習者は達成感を覚え、能力向上に集中できたという。一方、言語面でも社会的文化的な面でも分かりやすい分、ユーモアの構造に欠けている。前述の小噺は 2 つの役の間のやりとりに基づいていると言っても、ボケとツッコミの要素はないため、学習者がこれだけで日本のユーモアの構造を掴むことはできない。

ボケとツッコミを含む図 3 に示されている日本のジョークの基礎構造を教えるには、言うまでもなく、ボケとツッコミ自体から成っている日本の代表的な喜劇である漫才を何らかの形で取り入れるのが効果的である。しかしながら、授業の経験から言えば、紙上のみの漫才台本を用いると、学習者はやや物足りないという評価をくだし、やはり漫才における独特な身ぶり手ぶりを含んだ視覚映像で体験してはじめて完全な理解に達成すると言える。加えて、ツッコミの一種類だと言えるノリツッコミを外国人に教えることをテーマにしたおどけたバイラル映像のアニメもある。そのワンシーンの一部は以下の通りである。設定は、日本人の映画監督がア

メリカ人の俳優と撮影をする。

（ア）メリカ人の俳優：奴を呼ぶしかないな。テレフォンを持って来い。

［ぬいぐるみのエレファントを渡される］なに？これは“エレファント”。私が言ったのは“テレフォン”。

（カ）ントク：カット！[通訳のスジャータに対して]ん、ちょっと、何か足らんな。（中略）ちょっと違うよな。ちょっとノリツッコミというのを説明してやってくれへんか。

（ス）ジャータ：[俳優に対して不明朗な英語で]（...）（中略）

（ア）：OK、やって見ます。

（カ）：もう一回行こう。アクション！

（ア）：奴を呼ぶしかないな。テレフォンを持って来い。［ぬいぐるみのエレファントを渡される］そうそう。耳がでかくてね。お鼻が長くて。大きなアフリカのお友達。それが“エレファント”。っておい！［丼を渡される］そうそうこれこれ。エビが新鮮だね。めっちゃおいしい。“テンドン”っておい！［ぬいぐるみのペリカンを渡される］僕の大好きなピンクの鳥。可愛いよね、“ペリカン”ってコラー！（『ワクワクウォッチング』、エピソード5より[2)]

このような映像は面白いかつメタレベルでノリツッコミを説明するため、学習者の反響もよく、ノリツッコミの仕組みと日米の違いをよく分かったという。アニメのキャラのみならず、一般的な日本人がノリツッコミに携わるよい例は以下の讀賣テレビ放送の『秘密のケンミンSHOW』という娯楽番組からの断片である。

アナウンサー：ノリツッコミ実験その二。『他ケンミンと話そう』という偽コーナーで電話の代わりにあるものを。

取材者：宮城県民の方と携帯でつながっていますので、ちょっと話してもらってもいいですか。［ナスを渡す］

大阪人１：もしもし。あ、もしもし。なすなす。（中略）

取材者：沖縄の県民の方と今電話がつながっています。携帯電話です。［ナスを渡す］

大阪人２：これなぁ。あ、もしもし。ちょちゅう。ちょっちゅうねー。あー。ちょっちゅ。おい。これなすやないか。（中略）

アナウンサー：大都会東京でも同じことが起きるのか。新橋でもなすを片手に、ノリツッコミの実験を行った。こちらのおっしゃれ東京都の都民は。

取材者：北海道の方と電話でしゃべってほしい。携帯電話がつながっています。これ携帯電話です。［ナスを渡す］

東京人１：（笑）え？ありえないでしょ、これ。なす？

取材者：携帯です。

東京人１：携帯じゃないですよね。若干ドン引きですよね。（笑）

アナウンサー：ドン引きされた。（2008年９月25日の放送より）

偏見とも捉えられることを授業にしていいかはともかくして、このような映像を見ることによってユーモアに関しては東西の対立があり、大阪では筋に逆らう物を渡されたら、ノリツッコミを言うのが常識だと思われていることが分かる。

さて、日本人英語学習者の外国語ユーモア教育に関しては、構造の違いに踏まえて今度はや

りとりの仕組みではなく、むしろセットアップとパンチラインの間の関係とそのずれに重点を置く必要がある。このために、授業ではCrystal（1998）の理論を参照する。Crystalは言葉遊び（language play）を次のように定義している。

> 言葉遊びとは、自分のためまたは他の人のために、楽しみの源として言葉を操ることである。（中略）語、区、文、語の一部、音の群、文字の列などの言語特性を工夫して通常と異なる使い方をするのである。（p.1、原文英語、訳は筆者）

つまり、何を操るかによって、様々な言語学的なレベルで作用するジョークが出来る。より抽象的なレベルで言葉を操れば操るほど、セットアップとパンチラインの間のずれが分かりにくくなる。私的な調査であるが、英語母語話者に関しては最も単純なダジャレは幼稚園児に通じるが、語用論的なレベルで作用するジョークになれば、高度な認識能力や社会的文化的な知識が要求されるため、やはり中学生ぐらいにならないとそのジョークを理解ができないように思われる。本研究では 4 つのレベルを設け、授業を行った。図 4 はこの 4 つのレベルを示したものである。

形式・語彙のレベル	（幼稚園児相当）
意味のレベル（曖昧性）	（小学生高学年相当）
語用論のレベル	（中学生相当）
言語操作なし	

図 4　英語のジョークの言語学的なレベル

実際授業に使われていた様々なレベルのジョークの例と説明を記述したパワーポイントのスライドは図 5 にまとめられている。

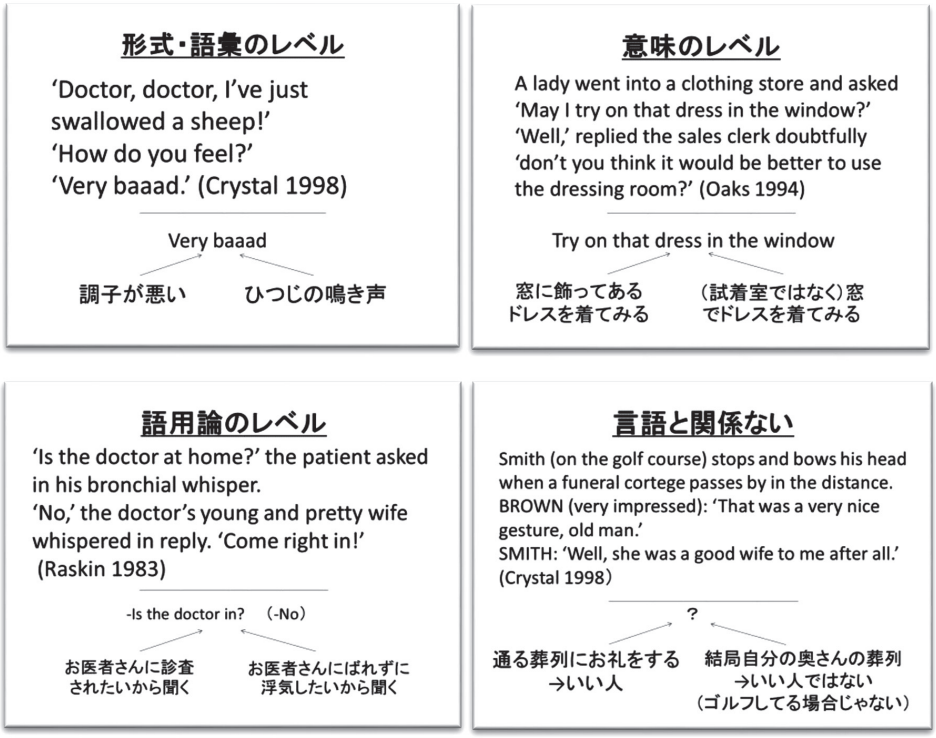


図 5　ジョークの実例と説明

右下のジョークは、Crystal（前掲）による言葉遊びと定義に当てはまらないことが分かる。つまり、このジョークでは特に言葉自体ではなく、シチュエーションやSmithの行動がおかしい。

英語のジョークのみを示せば、英語の学習者が笑わない場合があり、その際ジョークの説明および翻訳が必要となる。このように、ジョークを理解できたかどうかはある種の学習者のレベルをはかる手段にもなる。さらに興味深いことに、英語のジョークと言語学的な操作はグループワークに適していることが分かった。図 6 は授業で使われていた問題の例を表したものである。

練習問題：次のジョークを読んで、質問に答えなさい:

My friend said he knew a man with a wooden leg named Smith.
So I asked him "What was the name of his other leg?"

このジョークはなぜ面白いですか？どのような言語学的なレベルに操作していると思いますか？

図 6　グループワークの問題

学習者の評価としては、英語のジョークはパズルのようで興味深いが、ジョークを分かったとしても、そのジョークが面白いと思うとは限らないという。最後の段階は様々な英語のジョークを図 3 で示された欧米のジョークの基礎構造に当てはめることである。この作業を示したパワーポイントスライドの例が図はである。

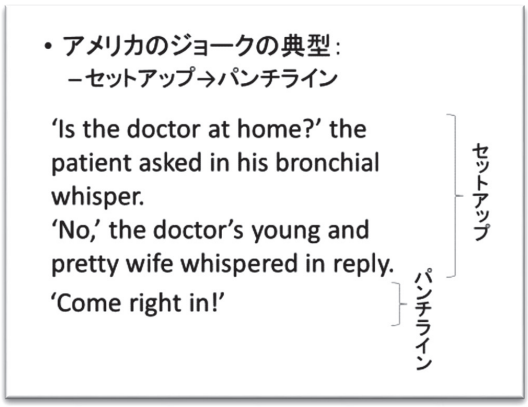
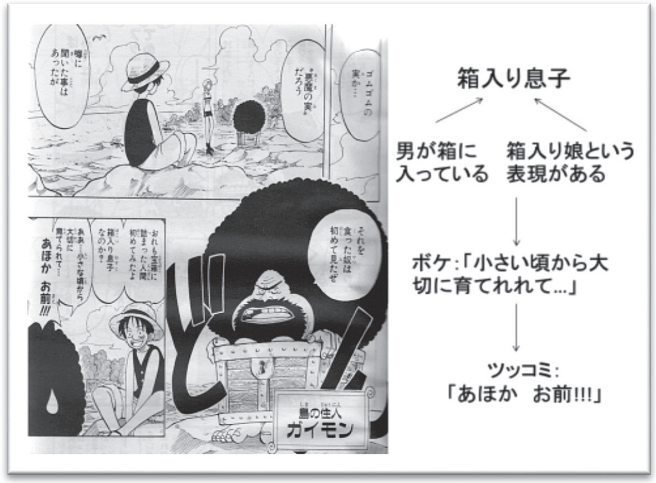


図 7　語用論的なレベルのジョークの基礎構造

日米のジョークの基礎構想を把握したところで、様々な分野でこの枠組みを応用することが可能となり、翻訳研究はこれを示すよい例である。本研究のケーススタディーとなった授業に海外によっても高い支持を得ている日本の漫画である『One Piece』（小田1997）を 2 回目の授業の最後に取り上げ、ユーモアの英訳に注目した。つまり、ある言語と文化社会におけるユーモアを異なる文化社会の言語に訳せば、何が起こるかを検討した。結論から先に言えば、翻訳者は直訳から意訳まで広範囲に及ぶ手法を用い、結果的にユーモアが対象言語にも伝わる時もあれば、全く失われる時もあるということである。ノリツッコミのシーンの英語訳が比較的流暢に当てられている例は以下の図 8 に示されている。授業用の説明は筆者によるものである。



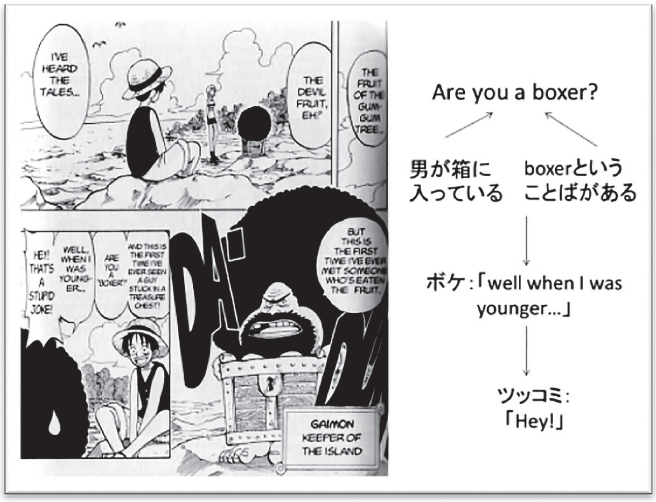


図 8　『One Piece』によるノリツッコミの原文と英訳

管見の限り、英語には「箱入り娘」に当たる表現がないため、そもそも上記のジョークを英語に翻訳するのは不可能に思われるが、ここで翻訳者は「箱」に注目し、英語のbox（箱）をboxer（拳闘家）と結びつけ、新たなジョークを作成したことが分かる。ジョークの具体的な内容は全く置き換えられているが、ユーモアの構造が守られている。

そもそもあるジョークは、「ロスト・イン・トランスレーション」になってしまうこと、すなわち対象言語で失われることは、どの翻訳者が全力を尽くしても、不可避のものだと思われる。筆者は授業で図 5 の右上のジョークを日本語に訳せよという課題を何回も出したことがあるが、ユーモアを残すのに成功した学生は今まで一人もいなかった。

考察

ここで、本研究で採用したケーススタディーから明らかになったことと教育への示唆を概評する。まずは、レベル別にケーススタディーを分析してみれば、初級者は、文化や言語の予備知識はそれほど要求されないユーモア教材を使うことによって、より外国語習得に集中できたことが分かったが、一方、ユーモアの言語的側面を理解しなくてもジェスチャや雰囲気を味わって授業を楽しむことができたと言える。上級者は、例えばやりとりに基づいている「ボケ」

と「ツッコミ」の概念を知ることによって、落語、関西関東の対立などの文化知識を習得したとともに、コミュニケーション力も上げたことが明らかになった。

一方、言語教育の観点からユーモアの構造を教えるのは困難である。外国語学習者が仮に学習言語のジョーク構造を理解しているとしても、あるジョークが面白いと思うとは限らないからである。しかしながら、先ほど述べたように文化の側面を考えれば、日本語学習者がやりとりに基づくジョークの構造を理解できれば、それは文学、社会学などの分野に応用出来る知識になると考えられる。

本研究のケーススタディーに採用した授業はユーモアを専門とする授業ではなく、ユーモア教育に当てた時間はわずか90分×２回だったため、効果についてさらに探究する必要があるが、傾向としては外国語のユーモア教育を行うことによっていくつかのメリットが見込まれる。まずは機能に関しては、ユーモアは本質的に楽しいため内的動機付けに繋がる。よって、語彙や漢字が覚えやすくなることも考えられる。加えて、ボケとツッコミからコミュニケーション能力の向上が生まれるのではないだろうか。一方、社会的文化的な面では、上記の授業において学習者が落語などの伝統芸能、関西関東の対立、日本のユーモアの代名詞である関西地域方言などについても学んだと言える。

終わりに

> ユーモアは教えることができない。もし説明しなければならないなら、それはもはやおかしくなくなってしまう。（Woolard 1996、豊田訳、2015、p.iv）

これは否定できないが、外国語学習者には、学習言語およびその地域の文化社会について包括的な知識を含んだカリキュラムを編成するのは極めて重要であると思われる。この意味でユーモアは日常生活において欠かせない教えるべき一部であると言える。学習言語のユーモアを知ることは異文化間および国際理解をはぐくむのではないだろうか。

ユーモアは外国語を学ぶには最終関門と思われがちだか、必ずしもそれほど複雑なことと考える必要はない。ジョークの基礎構造を把握すれば、後は言語能力と経験を増やすだけである。とは言え、理解から実際の応用への道のりは長い。特にツッコミを正しく使用するには絶妙なタイミングが要求される。筆者も以前タイミングが少しでも遅れたら「そこでツッコまなあかんやろ！」と何度も言われたことがある。ユーモアの能動的な能力については別稿に譲ることにしたい。

注

１）笑いの構造については、第３章で詳細に述べるが、落語も漫才と同様に会話形式に基づいていると考えられる（大島前掲）。大谷（1994）によれば、その違いは落語の場合、面白いことが第三者の目から見たものとなると言う。

２）シティファイナンシャル・ジャパンのネット用のCMに使われていたバイラル映像である。現在はYoutubeのみで見られる（http://www.youtube.com/watch?v=NK0mI2YHXp4）。

参考文献

Caillois, R.（1962）*Man, Play, and Games*. Thames and Hudson.

知的生活追跡班（2011）『お笑い芸人のウケる話し方のツボ』青春出版社.

Crystal, D.（1998）*Language Play*. Penguin.

東森勲（2011）『英語ジョークの研究―関連性理論による分析』開拓社.

Huizinga, J.（1938=1955）*Homo Ludens: A Study of the Play Element in Culture*. Beacon Press.

桂かい枝（2007）『桂かい枝の英語落語コレクション』DHC.

村瀬健（2015）『最強のコミュニケーション ツッコミ術』祥伝社.

南原清隆（2010）『僕の「日本人の笑」再発見：狂言でござる』祥伝社.

Oaks, D.（1994）“Non-verbal humor and joke performance.” *Humor: International Journal of Humor research* 17.

尾田栄一郎（1997 ～）『ワンピース』集英社（英語訳：Oda, E. 2003 ～ . *One piece*. Wiz Media.）

大島希巳江（2009）『英語で小噺! イングリッシュ・パフォーマンス実践教本』研究社.

大島希巳江（2013）『やってみよう! 教室で英語落語』三省堂.

大谷晃一（1994）『大阪学』新潮文庫.

丸山孝男（2002）『英語ジョークの教科書』大修館書店.

Raskin, V.（1984）*Semantic Mechanisms of Humor*. Springer.

Ruch, W., & Hehl, F. J.（1983）“Intolerance of ambiguity as a factor in the appreciation of humor.” *Personality and individual differences*, 4, 443-449.

タカハシマコト（2013）『ツッコミュニケーション：生活者を「相方」にするボケとツッコミの広告術』Kadokawa.

豊田一男（2015）『英文法再入門』開拓社.

Woolard, G.（1996）*Lessons with laughter*. Language Teaching Publications.

付記

本稿は、2014年11月15日・16日に香港大学港大保良社区書院で開催された「第10回国際日本語教育・日本研究シンポジウム」と、2015年 9 月10日・11日にスペインのUniversidad Católica de Murciaで開催されたIII International Conference on Linguistics, Literature and Cultural Studies in Modern Languages（CILLEC）において口頭発表した内容に加筆を施したものである。

（ヴォーゲ・ヨーラン　神戸女学院大学専任講師）